ステージ上の逸話（二）

兒玉　稔

半世紀の昔、我學生にして課外活動管絃樂團の一員なりき。

年に一度の定期演奏會の日。千數百人收容の市民會館大ホール、定刻になりて開演告ぐるブザー鳴り、ロビーにて談笑する客等、三々五々場内に入り、客席徐々に埋る。樂屋の我等、まだ薄暗きステージへ、樂器群ごとに進み、自席に着す。演奏者用パイプ椅子なり。

バイオリン、チェロなど絃樂器は舞臺最前面に半円狀に陣取りて指揮臺に向く。その後ろ、舞臺に設（しつら）へたる雛段を一段登りて木管樂器が席を占む。我は金管、喇叭（トランペット）手にて更にその奥に一段上り、最上段舞臺最奥の列にて、奏者大半の背中をやや下に見つゝ、その向うの客席に對面す。我の左、やや離れて太鼓（ティンパニ）手在りて同じく客の方を向く。

面々、椅子の具合や樂器の調子を試すうち、コンサートマスター登場。最前列中央に近き自席まで歩み、坐らずそのまま客に脊を向け、バイオリンの弓にてオーボエ奏者に合圖。ラ音を出さしむ。奏者銘々、そに合せて今一度、音を調ふ。これ、演奏前のお決まり、チューニングなり。

コンサートマスター、音の揃ふを確かめ、客に向直りて着席し、身體を指揮臺に向く。大ホール天井の電燈徐々に消され、客席、舞臺の我等より見えざる程に暗くなる。と、舞臺照明、急に強くなり、頰、熱くなるを覺ゆ。ステージ上、すでにして眩しき様となり、我等は、とき來たり、いざ、と氣を引締めて指揮者の登場を待つ。

その時、客席より異常なるざわめき立上る。女性の悲鳴もあり。舞臺上に何事か起きたらるむ。客はそれを正面に見をるべけれども、その舞臺にて客席の方を見る我等にはわからざりき。

ふと、ながし目に左手を見る。隣のティンパニ奏者、兩腕を一杯に伸ばし、左右の肩を支點になして二つの大き圓をぐるぐる廻しをり。彼が坐すパイプ椅子、前後にゆらゆら搖れ、客席の騷音喚聲更に高まり、一瞬、彼が姿、その椅子と共に我が視界より消ゆ。

ホール構造上、舞臺の後ろは壁なりき。彼と我は同列にして同じ雛段に乗る。雛壇は壁より手前に設置さるれば壁まで奥行一メートル弱の空間開きてあり。深さは一メートル余と記憶す。彼、坐り直さむと椅子を後ろにずらす時、段の幅を測り損ね、椅子の脚、段の端より後ろに出でて不安定を生じたるべし。バランスを取りて回復せむと兩の腕を激しく廻せどもその效なし。滿場客の嗚呼の叫びを誘ひつゝ、遂に椅子ごと狹間に落下するこそ哀れなれ。

そこ狹ければ、彼、尻を下に、伸ばせる兩手兩脚を上に、海老の態にして身動き儘ならず。我は呆氣にとられ、この事態卽座には理解し得ず。啞然として左、下方を見下ろす。窮屈に上ぐる兩腕の下より、助けよと目にて乞ふ彼ぞ氣の毒なる。

他の團員、客席騷がしきを訝しく思へど、彼等の背面に起きたるこの事件を知らず。客等は、雛段の後ろに隙間あるを氣附かざれば、太鼓手何處に消えしか不思議に思ひ居るべし。

腰など打ちて怪我なきかの心配、クラシックの場不似合の爲體（ていたらく）に吹出したき氣持、この醜態を素早く取繕ひて演奏會成功させざるべからずの決意、等々我に一時に生じたり。とは言ひ條、彼には申譯なきことながら、本番演奏に臨む緊張、覺悟、不安、これら一氣に緩みての解放感これ最大の思ひなりき。

席を立ちて彼に手を伸ばし、難儀して彼とその椅子を引張り上げ、係に合圖して舞臺を一旦暗轉せし

む。然るべく間を置きて、全員一呼吸の後、演奏を開始せり。演目の一はベートーベン交響曲「英雄」と記憶す。

彼、團の太鼓手急病にして、俄に參加せる外部奏者なれば、その後に會ふことなし。もし機會あらば、昔日の椿事、共に笑ひたし。

（完）

（平成三十年九月五日受附）